

## 講演会

### 「核兵器は本当になくせるの？ICANに聞いてみよう！」

日時 2018年1月16日（火）19:00～  
場所 国立オリンピック記念青少年総合センター  
主催 [核兵器廃絶日本NGO連絡会](#)

以下は、核兵器廃絶日本NGO連絡会によるまとめです。  
オリジナルは、動画（[こちら](#)）をご確認ください。

## 司会

本日は核兵器廃絶日本NGO連絡会主催のイベント「核兵器は本当になくせるの？ICANに聞いてみよう」に集まりいただき、ありがとうございます。司会をつとめるピースボートの渡辺里香と申します。よろしくお願いいたします。

昨年2017年はいろいろな意味を持つ1年となりました。七夕の日、国連では核兵器を違法とする初めての国際条約ができ、多くの国の賛同を得て採択されました。その採択に大きな貢献したということで核兵器廃絶国際キャンペーンICANが2017年のノーベル平和賞を受賞しました。7月10月と大きなイベントが続き、記念すべき年となりました。

今回ICAN事務局長・ベアトリス・フィンさんが長崎、広島、東京と来日して下さり、この講演会を開くこととなりました。2017年にとても大きなイベントがありましたが、これを機に世界が「核兵器はないほうがいいんだ」「核兵器の傘に守られていても安全じゃないんだ」となるのでしょうか。すぐに変わっていくのでしょうか。そのあたりを応援したい気持ちもありながらも、私たちはどこかで半信半疑な思いがあります。

今日はベアトリス・フィンさんを迎えていろいろなお話を伺ってほしいと思います。ベアトリスさんは北欧のスウェーデン出身で30代の女性でいらっしゃいます。2人の子どもを育てながら、大きな国際ネットワークであるNGOを率いていらっしゃいます。核保有国でも被爆国でもないスウェーデン出身の彼女がどんなことをきっかけに核廃絶を考えはじめ、今に至っているのか。少し個人的なことも含めてお話を伺えたらと思います。

川崎哲（核兵器廃絶日本NGO連絡会共同世話人、ピースボート共同代表、ICAN国際運営委員）

ICANは2007年に作られた核兵器廃絶のための活動をするNGOの連合体です。連合体ということは1つの組織というよりは、いろいろな団体が集まって力を発揮している。現在、101カ国468団体が参加をしており、その本部・国際事務局がスイス・ジュネーブにあります。なぜジュネーブにあるかという、ジュネーブには国連の欧州本部があり、様々な国の軍縮外交を担当する大使が集まっているからです。そこに本拠地を置くことによって、国連の軍縮外交に影響を与えていきたいと考えたからです。

ICANは、核保有国が核兵器廃絶をするのを待つのではなく、国連でしっかりとした条約を作ることが重要と考え、核兵器禁止条約を作るという目標を掲げ、活動をしてきました。最初は核戦争に反対する国際の医師の会（核戦争防止国際医師会議(IPPNW))から始まり、今では幅広い団体が参加するものとなりました。ベアトリス・フィンさんはジュネーブの事務所で事務局のリーダーをしています。大きな団体だと思われるかもしれないが、ジュネーブで仕事してるのはたった4人です。その4人が世界各国にメッセージを発信し、それを受けた日本やアメリカ、イギリス、オーストラリアなどの団体が活動を行います。日本ではピースボートが国際運営団体として入っています。今日の主催である日本NGO連絡会では、ピースボートが、ICANがどのような方向で禁止条約を作っているのか、禁止条約をどう実行していくかということをお報告してきました。この活動は一団体一個人ではできないので、国内的にも国際的にも連帯を進めてきています。

ベアトリスさん自身は、長く婦人国際平和自由連盟(WILPF)という100年以上の歴史のある女性の平和団体で仕事をしていました。2014年以降、ICANに移り、現在に至っています。今回ベアトリスさんは、長崎大学から「学生と討論してほしい」という依頼を受けて1週間来日することとなりました。長崎で2日間、広島で2日間を過ごし、資料館を訪問、講演、学生との対話をして下さいました。先ほどは議員会館にて国会議員との対話というものもしてきました。この一週間でベアトリスさんは日本の被爆者から学生、国会議員までいろいろな人と会ってきました。その彼女が東京の周辺に住む方たちに向けて、いろんなメッセージを発信することを期待します。

**ベアトリス・フィン（ICAN事務局長）**

今日は光栄な機会をいただきありがとうございます。なによりも今日ご参加くださった皆様に心から御礼申し上げたいと思います。もっと楽しいことがあったにも関わらず、核アルマゲドンなどの深刻な話を聞きに来てくださり、ありがとうございます。

核兵器は核兵器使用を防止するために存在すると言われていています。誰も核戦争を望んでいません。しかし核兵器を持って核戦争を防ごうという論理で核兵器の所持を認めています。市民に大きな被害をもたらす化学兵器、生物兵器、対人地雷、クラスター爆弾は禁止する動きがあり、実際に禁止されました。ただ核保有国は自国の権威のために所有しようと思っているわけです。おそらく核兵器は現代の中で一番大きな矛盾をはらんだ兵器だと思います。もう議論を始めないといけません。

日本に来て、日本人の方々が非常に大きな情熱をもって核兵器を廃絶したいという声を上げていらっしゃることに大変感銘を受けました。みなさんのエネルギー、情熱が本当ICANを勇気付けてくれています。もちろん日本はどの国よりも核兵器が使用された際の大惨事がどれほど酷いものかを理解している唯一の国です。被爆者の方々だけではない。被爆者の家族の方、広島長崎を復興されてきた方にもお会いしました。しかしそういう人たちだけでなく、若者たちが原爆の記憶を検証し、将来につなげていこうとしています。

人類を大量殺戮、大量破壊をする兵器を廃絶したいと70年間、人類は努力してきました。実際に核兵器に反対する署名を始めたのは70人の科学者でした。この人たちは核兵器を作ったマンハッタン計画に関わった科学者でした。広島長崎に原爆投下の命令をしたトルーマン大統領は、戦後、核兵器の使用は国際的な合意のもとでコントロールするべきという立場に立ちました。国連を創立するために働いたチャーチルは、国連議会に対して国際機関は核不拡散を行わなければならない、核兵器の使用は国際機関限定することを明確にするという演説を行った。レーガン大統領とゴルバチョフ大統領の2人は、核兵器を使われない道筋を夢見ていました。今になってレーガン自身も核兵器を使用しないことや核兵器の存在意義をなくそうとしていたこと分かってきます。

私たちが知っていることは今でも核兵器によって生存の脅威に脅かされながら生きている。警告の時間もない一瞬のうちに抹殺されるかもしれません。この週末でハワイで不幸なことが起きました。核兵器に攻撃されたという誤報が流れ、30分に渡って苦しい思いをしました。彼らは家族にさよならというメッセージを送り、子どもたちを抱えるために家に走り、恐怖の中で30分を待ち続けました。

私たちにによりよい方法があると思います。私たちは声をあげる権利を持っています。声をあげる権利、ICANの使命の大部分はここにありません。軍縮に民主主義をもたらすということが私たちICANの考えです。前の世代が解決できなかったことを私たちは解決することができます。しなければいけません。

どうやってすればいいのでしょうか？まず最初に政治的な意思を創造します。次に政治的な解決策を考え、実施しなければいけません。核兵器は、何百万人も市民を無差別に殺す兵器ということを政治家に理解させることが重要です。核兵器は力の象徴であったかもしれませんが、これは恥の兵器であると転換させなければいけません。現在、核戦争の危険性はこれまで以上に迫っていると思うかもしれません。アメリカは核兵器を作り、使用できるようにしようと思っています。北朝鮮も核兵器を発射させると脅しています。

しかし私はいいニュースも持っています。私たちは核兵器を禁止するところに近づいてきています。去年は122カ国が国連におきまして核兵器禁止条約の採択に署名しました。この条約により枠組みが作られ、50国が署名・批准をすることで条約は発効します。歴史を見てみますと、あらゆる兵器を禁止することが、その兵器を廃絶する第一歩になっています。つまり国際的条約によって非合法とされた兵器は、政治的なステータスをなくしていきます。核を保有していることがかっこいいなどという子供じみた話から変わらなければいけません。気軽にタバコを吸えなくなっただように核兵器の保有も意味もが変わってくるでしょう。禁止条約によって各国の国会での審議があり、市民社会の意見によって核兵器を持つべきではないという声が高まってくるでしょう。困難な道のりかもしれませんが必ず達成できます。ICANの中でも多くの人たちが声を上げ、禁止条約が発効していけば、核兵器廃絶は実現できます。

市民が政府に対して核兵器は合理的ではない、政府の核兵器に対する認識に変化を求めていることを訴えなければいけません。皆さんにはこの動きに参加してほしいのです。みなさんの声や価値観を聞かなければいけない人は1人です。その相手は政府です。日本政府はどの政府よりも核兵器の悲惨さを理解しているにもかかわらず、東京は核の傘の下に暮らしていることに対して恐怖や不満を感じないのでしょうか。広島や長崎で起きたことが他の都市で繰り返されてもいいと日本政府は思っているのでしょうか。皆さん方が声をあげて、政府に対して「核兵器のシステムに入ることは受け入れられない」と声をあげていかなければいけません。

私は、日本が世界の中での核軍縮の動きに対してリードを取ってほしいと思っています。そのためにも核兵器禁止条約に参加しなければいけないと考えています。日本は民主主義国家ですので、市民の願いに答えなければいけません。皆さん方国民が首相のボスにあたるのです。みなさんが声を上げ団結、連帯すれば、それを政府は無視することはでき

ません。政府が声を聞かないのであれば、更に声を大きく上げましょう。

皆さん方と同じように声をあげる人は、世界中に何百万人もいます。私たちは民主主義の世界で生きているので、常に選択する機会があります。私たちのリーダーが私たちの希望、将来を考えないのであれば、私たちは別のリーダーを代替案として選ばなければいけません。

核兵器を使用するという国には、国際的に孤立させなければいけません。孤立化することによってその国は恥をかきひどい汚名を着せられるという結果になるでしょう。核兵器を増大させるのではなく、いかに禁止していくかが重要なことなのです。禁止条約について批判する人がいますが、禁止条約は現実にあります。今後、より明確な存在となっていくことでしょう。核兵器禁止、廃絶を明確化していくのは私たち人間です。

核兵器は広島長崎で使用されて以降、使われていません。これは指導者が優秀だったのではなく、たまたま幸運によって使用されなかっただけなのです。私たちは運が尽きるのを黙ってみているわけにはいきません。数学者に聞きますと、核兵器の使用の可能性は低くないと言います。ということは時間が経てば、どこかで必ず核兵器が使われます。禁止条約を推進していると話すと、「あなた達は世の中のことを分かっていない」「考え方が甘い」などとよく批判されます。核兵器が最終的に使用されることと、核兵器廃絶を考えたときどちらが合理的でどちらが非合理的と考えるのでしょうか。

私たちはナイーブでもなければ、非合理的でもありません。私たちは人類の生存の側に立っています。私たちは何もしないことで手をこまねいているということはできません。なにもしないということは、核兵器を温存する側についていることになるからです。

この核兵器の問題は、核アルマゲドンなど、落ち込むような内容で力がなくなってしまうようなものですが、生きて行くために、核兵器の概念を変えるために力をふり絞らないといけません。実際に兵器が使用された場合のことを考えてください。ある朝、突然、空が落ちてきました。これは73年前に実際に起きたことです。恐怖への対策があるかという、それは希望です。

今日の講演の最後に皆さんに私やICANの希望について話したいと思います。私たちは核兵器に対して恐怖を抱くべきだと思います。この恐怖というものは、合理的な恐怖、現実的な恐怖です。これまでの歴史の中で核兵器使用に近いのは今だと思います。まさに刃が空から突き刺さろう

としています。戦争では、まず言葉の戦争があり、次に武力の戦争があります。現在。この武力の戦争に近づいています。その一方で、世界中のリーダーとともに核兵器廃絶のために近づいているとも言えます。つまり私たちは希望を持つ理由も持っているのです。この希望によって私たちは恐怖に打ち克たなければいけません。

私がICANに魅力を感じ、今日まで精力的に活動してきたのは、10年前にICANが発足してきた時の思いと同じで、待っていることに嫌気がさし行動を選んだからです。私たちは許可を待ち続けることをやめました。科学者や政府の人など様々な人から核兵器を廃棄することがどれだけ難しいかの話も聞き飽きました。私たちの意見が聞かれるまで辛抱強く待つこともやめました。テーブルの席が空くの待つこともやめました。ではなにをしましょうか。自分たちのテーブルを自分たちの手でテーブルを作りました。このテーブルの席に今日ここに來てくださっているみなさん全員に着いてもらいたいのです。核兵器が私たちを崩壊させる前に核兵器に終わりを告げなければいけません。人々の力によって核兵器がもたらした痕に終わりを告げることが必ずできると信じています。みなさんがこれを信じてくださるのであれば、ICANの一員になってください。

ICANはみなさんの情熱や希望を必要としています。皆さんたちの希望を共有するためにICANのHPの参加やFacebookのフォローをして下さい。私たちは一瞬の脅威におののきながら生き続けるのではなく、もっと希望のある未来を求めています。私たちにはそれを求める権利があり、政治家にそれを期待すべきです。政治家に私たちの希望を知らしめ、核兵器を必ず廃絶させましょう。これがICANの核兵器廃絶の道筋です。みなさんと一緒にこれを達成するために協力していくことを大変楽しみにしています。

### 質疑応答

**Q**なんで核兵器廃絶運動に関わったのですか。

**A**自分でも分かりません。偶然ここにいます。私は冷戦期の世代で核兵器というものの実感がなかった。私は始めは人権と環境問題に取り組んでいた。それらの問題に関わる中で、核兵器が現代にもたらす矛盾や大量破壊兵器であると感じていたことが今に繋がっているのかなというのが正直な印象です。

核兵器は大量破壊兵器であるため、通常の紛争には使えません。どう考えても道理にあわない、合理的でない兵器の存在を許している政治家は、国民に対し「核兵器は合理的な兵器だ」と説得しています。私はそ

のことから核兵器に対し関心を持ち、いろいろなディスカッションに参加し、核兵器が偽りの合理性や論理で成り立っているのか議論してきました。核兵器の使用は自殺行為としか思えません。自分をも破壊できる兵器を合理的だと考える論理の矛盾。この奇妙な論点が正論とされてきました。これはある意味では文化的な問題があるかもしれません。そもそもの考え方が問題なのかもしれません。

核兵器の問題は、検証の問題でも技術の問題でも複雑な過程をもった専門的な問題でもない。これは異常か正常かのどちらかということが突きつけられているだけです。

### **Q来日を決めた理由は何ですか**

**A**日本で核兵器がもたらす結果というものを自分の目で見たいと思ったからです。これまでは軍縮の問題はある程度年配の男性が背広を着て、エキスパートとしてワシントンや北京で活躍する人が取り組むものでした。しかし核兵器の脅威を知っているのは、被爆者で彼らがエキスパートなのです。私にとって日本、広島長崎に行ったことは重要だと思いました。実際に被爆者から話を聞くことは重要だと思いました。もちろん今までに被爆者から話を聞いたり、本や雑誌を読みました。しかし自分の目で見ることは全く違った経験です。被爆者が案内してくれたことに心から感謝している。人間ができる最悪な事態を目の当たりにしました。原爆から核兵器廃絶、軍縮に対してこのような活動ができるのだということを見て非常に希望を見ることができました。

### **Q日本が禁止条約に入らない最大の原因はなんだと思いますか**

**A**首相でしょうか（笑）。

日本はアメリカと軍事同盟を持っています。この同盟の基本になっているのは、核兵器を使用する、それを使用すると威嚇することによる抑止です。政府はこのあたりのことを詳しく言いたくないと思います。政府は「軍事同盟に入っている、我々は核兵器は持っていない。核兵器の使用について自分たちは責任をもたない」と言うでしょう。よく考えてみれば、広島長崎で起きた被害を他の町でもやるといふ脅しが政策の中心にあるということです。現在、障害になっていることは現実に対して挑戦しなければいけないということです。皆さんが首相の上司なんです。彼らの給料は皆さんの税金で賄われているわけですよ。禁止条約の批准を含め、皆さんが声をあげなければいけないのではないのでしょうか？

### **Q国連しか核兵器の管理はできないのではないのでしょうか**

**A**核兵器は誰も管理するべきではないと思います。禁止条約を発効させ、核兵器を所持する国に汚名を着せることに成功すれば、核保有国ももっと合理的な考え方をするようになり、核廃絶に向かっていくと私は考えています。

実際に化学兵器や生物兵器の禁止には誰も文句を言いませんでした。化学兵器などの所持が大国だという誇りになると考えている国はありません。核兵器を持つことが大国としてすごいことだということではないのです。核兵器が一体どんなものかということを知ってもらうことが重要です。核兵器を持ち続けたいという国には、テロリストしか使おうと思わないもので、おもちゃのように核兵器を持つことは恥ずかしいことだと説得していかなければいけない。

**田中熙巳**（核兵器廃絶日本NGO連絡会共同世話人、日本原水爆被害者団体協議会代表委員、ヒバクシャ国際署名連絡会代表）

フィンさんの講演を聞いて、明快に私たちがやらなければいけないことが分かりました。私たち被爆者は自分たちの体験を通して、被爆したときから核兵器を使ってはいけないと分かっていました。最初の10年は活動できなかったが、この60年間、核兵器を使ってはいけないと叫び続けてきました。危機感を感じながらも昨年に禁止条約が採択されました。時間がかかると思っていました、思いもよらない速さで禁止条約ができあがりました。私たちは希望をいただきました。この希望を皆さんと声にして行動したいと思っています。

被害の深刻さを知っているはずの日本政府が、核廃絶の思いは一緒と言いつつも、禁止条約に作る過程にも参加せず、批准もしていません。

日本国民が核廃絶を望んでいるにもかかわらず、それが実現できないのでしょうか。それは私たちが願いを希望に変えて行動していないからではないです。政府に任せておけばいいと思いは間違っているということはこちらにいなさんは分かっていると思います。ここにいない核廃絶を願う人たちの目を開くためには、被爆の経験を伝えなければいけないと思います。被爆者は広島長崎だけにいるわけではなく、日本全国にいるのです。私は埼玉に住んでいますが、神奈川にも東京にもいます。被爆者たちは高齢で焦っていますが、自分たちの苦しみを伝え、核兵器廃絶のために行動してほしいと願っています。

日本の市民運動は、政治家に直接訴えるという運動が少ないです。これを機会に禁止条約に批准することを外務省だけでなく、議員1人1人にも訴えていく運動を進めていきたいと思っています。国際的にも禁止条約が

でき、ICANがノーベル平和賞をもらい、海外に向けてこの2つのツールを大いに利用に廃絶のために運動していきます。